

令和5年度第2回 南丹市地域創生会議 議事録

■日 時：令和5年10月13日（金）午前9時30分～12時10分

■場 所：南丹市役所本庁 2号庁舎3階 301会議室

■出席者

委 員：今西委員、大槻委員、窪田委員、黒田委員、高御堂委員、谷口委員、
谷委員、中越委員、廣戸委員、俣野委員

事務局：市長公室 國府公室長

市長公室企画財政課 井尻課長、片山課長補佐、佐々江主事

■傍 聴：2名

1、開会(事務局)

・設置条例第6条第1項の規定に基づく会議成立報告

座長：

今回、今年度第2回目の評価となる。国から交付金をいただいている事業の評価をしていく。お忙しい中、たくさんの事業について評価していただきありがたく思う。たくさんの事業交付金を取っているということは、地域の中や市役所で知恵を練り良い案を出さないともらえない。そういう意味で評価する側の作業は大変ではあるが、地域にとってはとても良いことではないかと思う。

事業について、皮肉な見方をすれば地域でどうしてもやるべきことであると、上手に作文すれば国がお金を半分くれると見れなくはないが、そのように皮肉に捉える人もいる。けれども、もともとの主旨としては、東京だけでなく日本の各地域で仕事や生活が叶うまちを作っていく。そのために様々な事業をするべきであり、このようなことが必要だという新たな提案をしていくことで、その地域の力だけでは難しい分を、国が半分お金を出すということになる。私たちがその一端を担っている訳で、事後的に評価し、確かに効果的であった等。理想的には他所の地域にもおすすめることができるといったことを、ここで評価し、国に報告する役割を担っている。

地方創生事体は、2014年に始まっているのでそろそろ10年目を迎えようとしている。いろいろな新しい取組も出てきている訳だが、南丹発で全国に参考にしてもらえるような事業、取組があればいいなと思っている。

地方創生全体として、もともとの狙いは東京に行かないと選択肢がなく夢が叶わない、という状況を変えて全国各地でやりたいことやなってみたいものになれる地域をつくっていこうというもの。ある意味で地域のセレクト、集約化が進むのかなと思っていた。しかし、そこはそんなに正直見えていない部分がある。

この南丹地域においては、地域自体が住みよい地域になり、魅力のある地域になる可能性もある。さらに、比較的京都や大阪の都市部に出ていきやすいので、南丹でありとあらゆる夢が叶うような、地域内で完結しなくてはいけない、という切迫感はないと思う。程よい距離感のところに都市があること

を考慮しながらできればと思う。

では、細かい進め方は後ほど区切りごとに申し上げたい。今日は、1年間の南丹市の交付金をもらった取組を振り返り、改めて効果的な取組であったのか、他所におすすめできるのかを振り返っていくので、よろしくお願ひしたい。

そうした評価が今日のメインとなるが、その前に事務局から報告いただける内容があるとのことで、お願ひしたい。

2、報告：新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金事業について(事務局)

事務局：

<参考資料に基づき令和4年度にこの交付金を活用した主な事業について説明>

この臨時交付金は皆様に評価していただくというものではないため、報告のみとする。

3、議事

座長：

続いて、私たちの地方創生交付金事業について、こちら5割もらっているので評価をすればいい。これは、お金を出している側がしてくれていると思って。

こちらの私たちがしていることは、繰り返しになるが狙った通りの効果があったとか、地域にマッチしていたか、新しい価値を生み出したか、他の地域にも応用が可能か、そのような観点もある。宜しくお願ひしたい。

こうした評価は全国的に行われているところで、変わり種としてはもともと南丹市と協力しておこなった新しい評価の在り方の関係策やスピノフして出てきたもの。宇治田原町では学生による評価をさせていただいている。今日も傍聴に来ているゼミ生も一緒に宇治田原町の交付金の評価やアイデア出しもする。そのような変わり種もあるが、一般的に私たちがしているやり方で全国的に交付金事業の評価をしている。その中で、本市ではなかなか事業の概要だけ聞いて評価するのは中身を掴みにくいこともあるので、ヒアリングという形で担当部署に来てもらって話を聞く取組もしてきた。

本日は2つの部署から来ていただいでいて、まず保健医療課に来てもらっている。皆様に評価いただいた事業でいうと4-3の健康づくり推進事業を担当されている。事業の評価自体は既にしていただいでいるが、改めて折角の機会なので、どのような取組の背景があるのか実情がどういった点にあるのか、アイデアを尋ねてみるのもいいので直接お話ができる機会がもてる。

本日どうぞよろしくお願ひしたい。

■保健医療課

◇4-3 健康づくり推進事業

座長：

何か先に説明されたい等、あまり決まった形はないので気になるものからでも、先に補足があれば言っただく等、せつくなので一言お願ひしたい。

保健医療課：

特に資料はないので、口頭でも良ければ説明をさせていただきたい。

なんと健康都市というのを南丹市では掲げていて、けんこうのこうが幸。健康都市というのは何を指しているのかと言うと、住んでいるだけで健康で幸せになれるまちをつくっていくことを目指している。この、住んでいるだけで健康で幸せになれるというところだが、こちらについては医療のデータと検診のデータが結びつくという状況のデータヘルスが、国保の方で始まっている。それをもとに分析を、主に筑波大学でされている。その研究結果を見ると、住んでいる地域によって健康の格差が出てることが分かった。それは、検診とレセプトのデータが結びつくことによって分ってきたデータであり、食生活や普段の運動量であったり。そのようなところから、住んでいる地域によって健康に差が出るということが分っている。

例えば、都市部に住んでいる人の方が一日に歩いている歩数が多くて、田舎に住んでいる人ほど1日の平均歩数が少ないということが明らかになっている。この、南丹市を見ても、やはり500メートル先のコンビニに車で行っている方が多かったり、少し先の田んぼまで軽トラで行くことが多い。作業もあるから当然だが、日常的に歩くということが重要になっている。

1日平均歩数8,000歩と厚生労働省が定めている。この、8,000歩を毎日歩いていただくことが健康寿命を延ばす上で最も基礎的になるところがある。南丹市もこれを、ICTで皆様に取組んでいただく仕組みとして健康ポイント事業を令和3年度から始めた。この健康ポイント事業を中心に総合振興計画でも掲げている健康まちづくり事業を健康ポイントをハブにして全体を健康で幸せな住民の方が生涯暮らしていただく南丹市を目指していくために、健康ポイント事業を中心に事業を回しているのが現在の状況である。簡単ですが以上になる。

委員：

私たちのメンバーから2点質問をして、回答もいただいているが、それに関わってさらにでも結構で、その他についてもかまわない。何か意見などあるか。

2ヶ月ぐらい間が空いているので、まだエンジンがかかりきっていないところがあるかと思うが、この健康ポイントについて尋ねたい。

私もいろいろと忘れていた部分もあるのだが、登録した人がポイントを持つのか、全住民が最初から持っているようなものなのか。どんな制度だったか。

保健医療課：

健康ポイント事業については、参加者を募って参加していただいた方に活動量計、いわゆる万歩計かスマートフォンのアプリで1日の歩数を毎日計測していただき、送信拠点が市町にあるのでそちらで毎月1回、体重や筋肉量などを測ることでポイントがつく仕組みになっている。

委員：

今は何名ほど参加しているのか。

保健医療課：

1,658人。

委員：

そういう意味では、私は使っていないがスマートウォッチ的な物やアプリを入れる等。アプリでの健康管理は民間の普及があり、そういうものとの相乗効果を生んでほしいと思う。その点はどのように意識されているのか伺いたい。

保健医療課：

この仕組み自体が、4市町で連携するようになっている。そういった点からも計測機器については、タニタヘルスリンクの活動量計もしくは、スマートフォンでタニタのヘルスプラネットウォークというアプリで行うことが現状のルールになっている。既存の民間のヘルス機器との連携は今のところではできない。しかし、この4市町の地方創生事業を終える段階では、アップルウォッチやグーグルウォッチ等の一般的なヘルスケアとの連携も可能である。

委員：

先々の動向として、多くの人がスマホや時計で健康管理をするということがベースにあり、そこに市役所が上積みするようなことになるのかなと思って言ってみた。

保健医療課：

そもそもの仕組みが SIB、経産省がソーシャルインパクトボンドを始める際に、ヘルスケア部門でもしたいとの話があり、筑波大学の久野教授が相談を受けた段階で始まった。ポイントをつけるにあたって一番重要なのは、健康の結果が効果に結びつくものに対してポイントをつけることが重要である。民間の万歩計やヘルスケア機器がいろいろあるが、歩数をできるだけ正確に取っていかないと健康の結果に結びつかない。正確に取れないものに対してポイントを付けるのは、税金の無駄遣いだと言うのが久野先生の大きな考え方であって認定ができる機器で行っていくのが筋としてあったので、今の状況である。

委員：

教えていただきありがたい。私個人で聞きたいことはたくさんあるが、折角なので皆様も。

舞鶴や他の地域でもこのような取組をしたリストの評価に関わったり、京都府でもされていたがウォーキングのイベントと掛け合わせたりというのがあった。関わっていたので聞きたいことはいろいろある。

委員：

今まではスマホではできなくて、活動量計だけの時代があった。

保健医療課：

2年目にスマートフォンを一旦外した。

委員：

1番最初、ケータイは普段から持ち歩くので自動で測ってくれたらうれしいと思っていたが、別の物を付けるのは家に帰っても付けることが面倒だなと思ってしなかった。スマホでもできるようになり、友人の勧めで、今年参加していて結構正確に図ってくれる。そして、月に1回、計測をすることで自分の体がどのように変化しているのか分かり、良いなと思って使用している。

ただ、最初に説明書が来て読むことが難しいと感じた。順序等が、熟読しても習慣化するまで難しかった。でも、計測に行くと自分よりも年配の方々がたくさんいて積極的に使用されていたので、習慣になるとどんな年齢の方でも楽しく参加できると思った。計測スポットに行ってもスマホの置き方や方法が分らず冷や汗をかきながらしたこともあったので、どのようにすれば参加者が増えるのかな、と自分が参加していて考える部分である。

自分が参加していて周りにも言うが、知らない人が多い。どのようにすれば普及し、自分の意思で参加されるようになるのかな、と思う。すごく良いので、できればたくさんの方が難しく思わずにできる方法があれば良いと思う。

広報に関わる人間なので、広報の方法や、今年は方法等のビデオも作成した。作成している段階で毎日ずっと見ている参加方法を理解した部分があったので、もう少し広報を上手くできれば参加者が増えるのではないかと思った。

委員：

健幸ポイントと言うのは全国的にあるが、基本は同じものなのか。

保健医療課：

いろいろで、歩くことを基本にしているところが多い。

委員：

自治体による差を健幸ポイントで今検索してみた。動画を作成しているところもあり工夫がされている。本市ではどうなのか。

保健医療課：

KCN なんとんと動画を作成したこともあるが、健幸ポイントに参加している方に健幸マイスターという認定をしている。8月の広報にも出ていただいたが、健幸ポイントに精通していて、口コミでたくさんの方に伝えたいという方の養成をしている。定期的に健幸ステーション、例えば市役所の1階やアスエルそのべとかiスタ八木とかに置いているが、そういったところで隙間時間にその方々に出向いていただき、来られる方のサポートをしたり、新たに参加希望の方に機器の使い方、登録方法などを伝えていただくように認定をしている。そういったことで、できるだけ広めていきたいと思っている。

委員：

なかなか、努力のいる。健幸ポイントは何かに見えるのか。

保健医療課：

健幸ポイントは南丹市の商品券に引き換えることが可能。

委員：

やはり、何か魅力があった方が良いと思う。他にも市役所の何か、税金が安くなるなど。お金がかかるものは、予算もかかるので何か使えそうで使えなさそうな。ポイントを貯めたいような、工夫も知恵の絞りどころである。

保健医療課：

商品券を出すので、できれば商店街の皆様にも健幸マイスターになっていただきたい。健幸ポイント、ご自身が健康になっていただくことが第1の目的ではあるが、歩くだけではなく活動量計を下げ歩いて歩くことで1つの目印になる。お互いに同志的な。

委員：

同志。仲間意識を。

保健医療課：

知らない人同士が同志で繋がってるような。そういうところも効果としてはある。コロナ禍で分かったことだが、孤独というのがタバコよりも有害と言われている状況で、孤独な方をいかに防いで健康寿命を延ばしていくか。介護と医療の負担をできるだけ抑えていくことが、超高齢化社会の中で重要な命題であるので、役立つツールになるかと思う。

委員：

私も付けているが、機械に読み取ると八木町の中であなたは何位です、と出てくるので面白い。

委員：

それは、ポイントを上げていきたい気持ちになるのか。

委員：

上げるために歩こうとは私はあまり思わないので申し訳ないが、できる範囲で歩こうと思う。人と会わなくても同志的な感覚で、こんなに頑張っている人がいるんだな、と思える。

委員：

なかなか、本市だけでシステムを工夫したりはできない部分も多いと思うが、ポイントの付与やランキングで背中を押す、目標を掲げて引っ張るというのは、まさに知恵の絞りどころである。

語学学習なんかでも、私はアプリを使っていると、あと何ポイントでランクが上がる、落ちるなど。落ちたくはないので、もうひと頑張りしてみたり。

卑怯ですが、南丹市に1,000円寄附するとポイントが上がるとか。もはや本末転倒も著しいが、ランクが落ちるのが嫌だったら寄附してしまおうと、お金を集めるみたいな感じで、非常に工夫の余地がある。

基本的には健康を真摯に追及されている姿勢が非常に伝わってきたが、もう少し幅を広げて全市で色んなポイントを交換できるようにするなど、とても工夫の余地がある分野だなと、とても注目している。

委員：

検診に行った時のポイントも良いなと思う。書くことが面倒で、いいなと思いついてはいい。鍼灸大学もあり取組む場所がたくさんあるので、上手く連携してもう少ししやすくなればいいな、と思う。

委員：

1人1人の状況を自分で知ってもらうために、明治国際医療大学の伊藤和憲先生の方で開発されたYOMOGI+という「未病」を測定できるアプリがある。未病とは健康と病気の間で、病気でもないが健康でもない、どこか整っていない状態を指すが、いろいろなタイプがあるすごく頑張り過ぎて常に緊張した状態(アクセルタイプ)、体力やパワーが落ちてきている状態(エンジンタイプ)、生活習慣が乱れている状態(ガソリンタイプ)。3つのタイプに分れていて、それぞれの人に合う養生、暮らし方をどのように定着させていくのか。保健医療課や商工会等と連携していただき、先程もあつたいろいろなお店で、あなたにはこういう物を食べてもらったり、このようなことをしてもらったら良い、というのが地域で広がればいいと思う。

住民もそうだが、この地域に来ていただいた人に、お店の人がお話いただける環境を進めていきたい。伊藤先生の方では、養生のプログラムを作っておられる。健幸アンバサダーも非常に良い取組。確かアンバサダーをされている委員もおられる。そういう方々がどんどん発信していただけたらと思う。

委員：

心苦しく、前年度よりもポイントの参加が増えていて、近所の友達も市役所や支所で計測されている。

先程おっしゃっていた、コロナ禍で高齢者が1人きりで鬱と言いますか、そういったことにポイントの中で事業としてされているか。

保健医療課：

健幸ポイントというより、その仕組みを利用して、高齢者の一般介護事業でも南丹市では進めているが、各地のサロンがあるので、そこでこの健幸ポイントを上手く活用してほしいと思っている。

委員：

サロンとは。

保健医療課：

各地域にサロンが開かれているので、高齢者の方が集まって筋トレをしたり、健康麻雀をしたり様々なことをされていると思う。そういう時に、計測機を貸出できるので、社協が中心に使用しているが、機器を貸出してサロンで計測したり、使用方法を聞くなどしてもらいたい。健幸アンバサダーであれば、健幸通信も来るので、「減塩していくことは高血圧には重要であるが日本人の食生活そのものが減塩には合っていないというか、真逆の食生活をしている。カリウムを摂ると排塩ができる。」という情報も健幸アンバサダーにはお伝えしている。そういうところの会話のきっかけに使っていただけたらと思う。

委員：

また、サロンの中で啓発などしていったらいいと思う。

保健医療課：

健康を求めない人は99.9%ぐらい無いと思う。皆様共通する話題としては、健康だと思う。健康については、誰とでも気持ちよく話せる、一つのツールとして優れている。

委員：

先程、ポイントについて教えていただいたが、子どものレシピコンテスト、今年はどうだったか。子どもの数も減っているの、どうなのかなと。

保健医療課：

今年度も昨年度同様に実施させていただき、小中学校でもたくさんの応募いただき、各学校で作成していただいた。また、審査に入る。

委員：

はい、承知しました。

座長：

まだまだ尋ねたいところではあるが、時間の都合もあるのでこのぐらいで。

もっと、ここを聞かれるのではないかと、ここをつかれるのではないかなどはなかったか。私たちの方としては、取組をいろいろと教えていただいた。既に取り組を進められているが、私を含めて様々な委員からも出たように今後益々重要になり、工夫のしがいもある分野だと思うので期待もしている。今後ともよろしく願いたい。

保健医療課については、ここまでで終了する。

■地域振興課

- ◇2-1 空家流動化対策事業
- ◇2-2 定住促進サポートセンター運営事業
- ◇2-3 移住者起業支援事業
- ◇2-4 おためし地方暮らし推進事業
- ◇2-7 山陰本線南丹市広告宣伝事業

座長：

ここから30分ぐらいは、地域振興課に願いたい。

委員の皆様には評価をお願いした事業は、2-1の空家流動化対策事業、2-2定住促進サポートセンター運営事業、2-3移住者起業支援事業、2-4おためし地方暮らし推進事業、2-7山陰本線南丹市広告宣伝事業。

人の流れを地方に作り出すということで、裾野としては関係人口、交流人口。移住者も増やしていく、定住して周囲と調和しつつ活躍してもらうことは、とても重要なこと。

委員からいろいろと質問させていただきたい。

皆様どこからでも結構なので、願いたい。

委員：

一般的な質問で、ふわつとしたことで恐縮であるが、コロナのステージが変わったように言われている中で、移住者の増減や関心を持たれる方の傾向を課でどのように捉えられているのか。感覚的なことになるが、尋ねたい。

地域振興課：

コロナ前から移住定住の動向は地方へ向いてきていた。その中で、コロナを契機として、移住相談件数はかなり増えている。それと合わせて、移住者の数も増えている。令和3年度、4年度は、転入超過している。ただ、移住そのものは一つの要因だけで移住される方はほとんどいない。色んな要因を含めて、最終的に移住を決断される。

コロナをきっかけということがあったが、50年以上かけて人口が減少している状況の中でここ数年間の出来事である。一つの要因とは考えられるが、決してそれだけではない。その一つの要因としてコロナが後押しをしたと分析している。

委員：

最近コロナのステージが変わったので、そつぽを向かれたりはしてないのか。

地域振興課：

そつぽを向かれるということはないが、昨年あたりは少し勢いが落ちたと感じた。ところが今年度に関しては、移住相談件数もかなり増えているので、新しいステージになったといって勢いが削がれたという風には感じていない。

委員：

また、感覚的な移住関係の質問になるが、色んな手段を打たれていると思うが、本市としての売り、これが効いているのではないか、というのはどんなものがあるのか。最近、別の機会に総務省が2021年ぐらいに出した、移住定住事例集みたいなものを読んだ。6つあり、最初知ってもらおうところから、最後移住の決断をする。というまでのステージでどのようなことをしているのか。

全国で24くらいの事例を紹介している冊子がある。南丹市はどのような手段なのか。例えば、長野県の大町市であれば、コロナ禍の話になるので、テーマ別の座談会をされた。単身の女性で来られた方に何人か集まってもらい、座談会をしているところをオンライン配信して質問を受付ける等テーマ別座談会のようなものをYouTube配信をされていた。移住者の駅みみたいなものを作り、「移住したい人は飛び込みでいつでも相談してください」と看板等を立てた施設や個人のところで、ぶらりと訪れた時に相談できるようにする。予約し相談する役所やコンシェルジュとは違う、いつでも行けるように工夫している。様々な事例が載っている。

南丹市では、どのようなことを重視して、どんな期待をされているのか伺いたい。

地域振興課：

1つの取組だけで移住が決まるということはない。南丹市の特徴は、南北に長いまち。比較的、都市に近い環境だが自然がすぐ近くにある。選択肢が多く提供できるところが、南丹市の地理的な良さだと思う。南丹市の政策で中心になっているのは、定住促進サポートセンター。専門の職員が2人いて、その職員がもともと移住者であり不動産事業にも従事していた。移住される際に気になることにお答えできる環境を既に持っている。それと合わせて、市の方針として移住された方をどのように地域と結び付けていくか。アフターフォローも含めてトータル的にサポートセンターで対応している。その中で特に、他所にない機能として、特に耕作放棄地が目立つ状況なので、本格就農に対する相談窓口は京都府にもあるが、そこに相当たらない、小さい規模で畑や自家菜園を希望されるがどこに相談すれば良いか分からない移住者が非常に多い。これに対する専門の窓口を、定住促進サポートセンタ

一に併設した。小さな農に対する、最初の一步をサポートしている、というのは他の市町にない特徴かと思う。

委員：

一番下の2-7の山陰本線南丹市広告宣伝事業。公共交通機関の中でPRすることについては、なかなか効果や手応えを掴みにくいところがあるが、実施の担当部署としてはどのような認識か。私自身の個人の印象で言うと、デジタルサイネージや中吊りで見るときれいになっているし良いと思うが、効果の認識がどのようなものか直接尋ねてみたい。

地域振興課：

おっしゃった通り、なかなか効果を比較することは難しい。この事業については、南丹市を知ってもらい、来訪いただき、公共交通を利用してもらおう。他府県であれば京都まで来ていただいて、JR 嵯峨野線、山陰線の利用促進も高めていただく。観光や小売りはもちろん、ふるさと納税や定住促進など、その点は狙って、事業の展開はしている。

比較するのであれば、資料にも記載しているがホームページ。どのくらいの方が見て、南丹市に興味を持ち、アクセスしていただけるのか。その点が、数値として比較できると思い、現在事業を進めている状況である。

委員：

東京圏でも宣伝されていると聞いた。これも、聞かれても困られるかと思うが、嵯峨野山陰本線に乗せて近場の方々を招き入れることが効果的なのか、東京圏でかやぶきなど日本のふるさとがここにあり、京都からはすぐに来れるので、京都からついでに来てもらうように宣伝するのがいいのか、どちらもあり得るように思う。どこを重点的にどんな考え方が伺いたい。

地域振興課：

以前は関西圏のみであった。令和2年度から首都圏にも広報した。広く広報し、ふるさと納税にも繋げるために、首都圏にも広報をしている状況である。

関西圏については、大阪の環状線に、京都駅はマルチビジョンに南丹市を放映している。直接的ではないが、嵯峨野線のアクセスに繋がる1つとして広報させていただいている。

委員：

効果はどうか。東京圏まで離れると特にイメージはないので、南丹市というのがあるのか。京都駅から電車1本で行けるのか、いいな、とフラットに入ってくると思う。

京都や大阪であれば、名前である程度のイメージがあるので宣伝をしてもそこまで変わらないかもしれないという見方もあると思うが、良い広告を作成して何年もしてきて徐々に変わりつつあるのか。見ていて私の方に答えはないが、どのようにお考えか。

地域振興課：

事前に南丹市ホームページのアクセス数を調査した。昨年の事業数値から現在の数値が1.5倍ぐらい。しかしながら、マルチビジョンなどの広報を見ない方もいるため、それは数値的に表れてこない。JRの利用促進の観点から言うと、広報などをしてコロナ前よりは徐々に戻ってきている。その点が、広

報に直接繋がっているのかは難しいところではあるが、事業の効果も少しはあるのかなという見解である。

委員：

1. 5倍とおっしゃったのは、ユーザー数か、それともPV数か。

地域振興課：

ホームページのアクセス数。アクセスして見られた数値を月数で付けている。変動がすごくあり、一概に平均数値は出せないが、去年の広報する前から今の数値を見た平均の数値を伝えた。

委員：

私たちが良く、デジタル広告を出すのが、例えば、首都圏で12月1日から12月31日まで掲載されていて、その間のパソコンのユーザー数を見て仮に首都圏の方々のユーザー数があがっていればきっとその広告の成果だと根拠になる。京都駅の部分8, 9, 10, 11, 12月で多少上がっているのが見えれば分かりやすく根拠になるのかなと思った。

各担当課で、地域振興課は移住のプロモーション、秘書広報課でシティプロモーションをしていて、別の課でものづくりのまち、あるいは先ほどの健康のまちとか、いろんな要因があって移住してくださる方がいるとおっしゃられたこともあると思うものの、南丹市というのはこんな町だという大体イメージを持って移住されると思う。他課との連携で、南丹市をどのように見せていくのかという場はあるのか。

地域振興課：

この広告宣伝事業を実施するにあたっては、観光交流室、商工課、秘書広報課、ホームページなどの広報的なもの、それぞれ関係のある課と連携している。デザイン等、どのような広告にするのか、事前に皆で検討して出しているという経過である。

委員：

南丹市広告本部みたいなものをつくるよりは、連携しながらそれぞれにする方が機能的によいということなのか。

地域振興課：

ふるさと納税であれば、商工課。観光であれば、観光交流室になり、ホームページになれば秘書広報課。それぞれに分れているので地域振興課が声掛けをして皆に協力していただき、より良いものを作ろう、として事業をしている。本部等を作るのは難しい点があるので、協力をお願いして展開している。

市、全体のシティプロモーションという観点では秘書広報課が大元になる。そこを中心に観光分野での連携などをする。

委員：

お隣の京丹波町が今日プロモーション戦略をプレス発表された。実際に京丹波町のまち、ブランドとは何なのかを掘り下げて、町民、職員、アドバイザーなどで構成された官民連携プロモーションチーム京丹波イノベーション・ラボで議論され、「GREEN GREEN」をキー・ワードとした戦略を策定された。

亀岡市でも、いろんな部門がプロモーションするが、広報プロモーション課の方でグリップして、必ず市全体のブランディングをどのようにするのかという一貫性のある戦略的な観点から発信されている。

南丹市も基本的には、秘書広報課がされるとのことなので、その辺りの仕組化や、先程もあった、どのようなまちになるのか、どのようなブランドなのかを掘り下げた議論を深めていただけたら、より効果的なプロモーションができるのではないかな。

どうしても、各部門でそれぞれの思惑があると思う。地域振興課だけの問題ではないと思うが、全体のブランディングを議論し、共有されてはどうか。他の事業も出ているが、複数の課が似たようなミッションに対応されている部分があると思うので、束ねる仕掛けを検討いただきたい。

移住については、南丹市はすごく頑張っておられて移住者のニーズが多くて、空家物件が足りない状況の中でサポートいただく体制もつくっている。地域も、非常に熱心な地域とそうでないところもあり、できれば掘り起こしというか、今まで積極的ではなかった地域ももう少し受け入れていこうという、危機感がないとなかなか難しいところだが、もう一押しすれば、頑張ってくださいるところがあるのかな、と思う。そのあたりの感触をお伺いしたい。

地域振興課：

空家の登録物件の数と、移住希望者の数が釣り合っていないのはその通りである。空家の利用者登録は、掛け持ちで南丹市を専願されているわけではないため、当然増えることが多い。ただ、数字を抜きにして地域に空家が無いのかというと、本人が空家と言わない限り空家では無いが、それを活用しても良いと言ってもらえるかが非常に難しいところである。なので、南丹市は空家掘り起こし事業で、同級生や親戚などのもとと集落にある縁を活用した取組みを推進してきたことで、そこに関して一定の成果があった。

空家所有者は圧倒的に市外におられる方が多い。集落と縁のある方はそこでなんとかなったとしても、既に縁の無い方にどう情報を届けるのかが非常に難しい。

例えば、空家対策計画に基づく特定空家やいろいろな手法があるが、定住促進を目的にした税情報の開示。例えば固定資産税などは認められていない。どうするといいいのかと言うと、固定資産税の納付書を送付する時に、令和4年から個別に空き家バンクの情報を確実に届く方法を取り入れている。

そして、危機感のない地域に対してどう働きかけるのか。強制をする訳にはいかないもので、数字的な現状を集落に対して伝える。移住促進、定住促進は地域を良くするための一手法かなと思う。地域を良くしていこうと思うと、担い手を確保しないと将来前に進んでいかないと認識してもらう必要がある。そのための情報開示やそれを実現するための手段を伝えるために定住ガイドブックを作っている。区長会で説明するだけでなく、旧村単位や集落単位に定住促進に係る意見交換会があれば、職員が行き話しましょうと打ち出している。集落で集まる機会も減ってきている。この間は、摩気地区、宮島にもお邪魔した。少し、小さい単位で住民地域団体と交わる機会を通じて、危機感を煽るわけではないが地域と一緒に取組んでいくスタイルを作っていきたいと感じている。

委員：

ホームページの検索者数が増えている件について、ホームページのトップページは見て、行きたいとか住みたいかと思うようなデザインになっているのかな、と思った。住民や近隣住民が情報を得るために検索した際に、基本的に分かりやすければ良いと思うが、遠方の方がサイネージを見て検索することが含まれているのであれば、工夫がある方が良く思う。

地域振興課：

秘書広報課が業者とのやり取りを含めてデザインを決めている。おっしゃる通りである。どんどん奥に入らないと目的にたどりつけない感じもあるので、分かりやすいことが一番だと思う。ワンクリックやツークリックぐらいで目的に辿り着けることが理想である。これは、市全体の話になるので共有させていただく。

移住定住の観点でいうと、ホームページで見やすいようにという考えで作成されていると聞いている。南丹市の移住定住に結び付くサイトとしては、南丹市のホームページと別に「nancla」というサイトを持っている。

委員：

ホームページと多少関係があると思うが、動画や SNS、インスタグラム、YouTube、動画チャンネルの運用、この辺りも秘書広報課になるのか。宣伝において、どのような位置付けをされているのか。今後の見通し、5年10年のスパンでいうとインスタグラムから情報を得ている、テレビではなく YouTube を主に見ている世代が移住対象になってくると思うが、その辺りの利用を増やして行く工夫等は、連携をされるうえであるのか。

南丹市も動画チャンネルはあり、言いにくいが多くても1,000ビュー程しかない。正直そんなに見られているように思えない。吊り広告を出すにしても、二次元バーコードを付けて動画に誘導する方法がある。もう少し、動画等の利用をされてもいいかなと思うが、その辺りはどうか。

地域振興課：

この辺りこそ、プロモーション戦略で徐々にしていこうかということである。私共だけでは答えにくいところであるが、地域振興課でしているシティプロモーションのごく一部の個別のパーツにおいて、プロモーション戦略の大枠の中でどこに位置付けていくかを秘書広報課と調整したい。今後の時代に応じたものを共に考えていきたい。

委員：

一部、集落の紹介動画もあったように思う。これは、市役所で作成しているのか、民間がしているのか。南丹市動画チャンネルの動画一覧を見たときに、猫は室内で飼いましょうとか、道路の愛称が決まったとか、総合防災訓練を実施したとか、市長の年頭のあいさつとか、ふるさと納税の紹介とか、この辺りは分かるが、いくつか集落を紹介してるもの等、関連の有無が分からないものがあるように思う。

地域振興課：

動画にどのような要件を兼ね備えると入っていけるのか、私どもには分かりかねる。自分たちの集落を紹介する動画に関しては、市の地域情報発信ツール整備事業で支援している。関連があるか分からないが、JRのお試し暮らしの事業を利用され、南丹市の定住を考えている方が映像スキルのある方で集落と映画作りの取組みをされている。

委員：

以前いろいろと教えていただいた、集落と様々な取組みをされている。動画や SNS にも少しずつ目を向けられても良いのかなと思う。

委員：

全部の動画を市が管理するのは難しいと思う。個人で動画作成できる方や、地域おこし協力隊の中で SNS に長けている方もいると思う。発信される時に、ここは守ってほしいとか、課などで出たテーマや内容を入れてほしいとお願いして連携を取っていけると良いと思う。

委員：

一定の要件を取って、南丹市とコラボのようなもの。南丹市の動画チャンネルにのる。それを離れてされたい方もいれば、関わりを持ちたい方もいると思う。

委員：

関りたいと思う人がいたら、何かの要件をクリアすると、南丹市の動画チャンネルにのる、というようなものがあれば良いのかなと思う。

委員：

Instagramはまさにそう。南丹広域振興局がこの何年間ハッシュタグの要件をつけて、京都丹波のInstagram発信を行っている。実は後ろに来ているゼミ生と昼からそれに行くわけだが。

市、独自でも工夫をされたら良いと思う。これから想定される、移住してくる層に繋がる戦略ができればと思う。

委員：

移住者起業支援事業で、10件支援されていて効果があるように思う。銀行の窓口でも、飲食店を開業する方が多くいた。移住された方が、その地域で継続して事業をされることが大事だと思う。10件のうち、いろいろな業種があるが、成功されている企業や頑張っておられる企業ばかりだと思うが、その中で特に地域と一緒にされている事例があれば教えていただきたい。

地域振興課：

個人の起業を税金で支援するというので、様々な意見がある事業ではある。税金で支援する限り、社会的意義が必要で、地域貢献を要件で定めている。自分の好きなことを起業したいという人を支援する性格の事業ではない。申請される時から地域と連携を取っているかの要件を必ず確認している。

今年度からは、ハードルを上げる意味はないが、市独自の要件として、南丹市商工会の伴走支援か、創業セミナーを受けることを付け加えている。この意味は、更に地域の団体と連携をして起業を進めて欲しいとの思いである。

どこが活躍されているかと言うとそれぞれの分野で活躍されていて、想定以上に成功されている方をお見受けしている。ここでの公表は控えたい。

委員：

お試し地方暮らしの事業で、お試しで住めるところは特定の民家を提供していると捉えているが、その認識で良いのか。

地域振興課：

お試し暮らしは全国どこでもされている事業で、なかなか上手く行っていないところもあると聞いている。これは、移住者のニーズがお試しがあればいいなという、そのニーズだけに沿ってしまうと、自分勝手な使い方なのか長期間釣りに行きたいので使う、といった事例も聞いている。

南丹市がお試し暮らしに取り組んだ経過は、お試し住居にどんどん入ってもらおうというよりも、JRの発信力を活用して南丹市をもっと知ってもらおう。そして、地方に向いてきた流れを他の自治体と組むことによってもっと大きな動きにして、先頭に立ちたいと思い取り組んだ事業である。

お試し暮らしを積極的に推進することよりも、活用しながら地方にいろいろな流れを呼び込みたいと思っている。お試し住居に関しては、単に短期間貸せる物件を選定している訳ではなく、地域団体が管理している物件で、そこに短期間でも入ってもらおうことで地域に繋がっていただけるような物件。具体的に言うと、既に入居できない物件もある。五ヶ荘の住みよいむらづくり協議会と協働して作った住宅、これは市が直営で管理している物件で、定着支援は地域でもらう協定に基づいて管理している物件。それが2件ある。あと、2件はそれぞれの地域団体が管理をしている物件で、計4件ある。

委員：

既に触れていただいたが、他の地域でも安価で泊まれる施設を作って泊まってもらうパターンもある。私事だが、舞鶴にサテライトオフィスがあり、週に2日間泊まるが他より安く、いろいろな人が来ている。長期居住しようというよりは、リモートワークやYouTubeで配信をしている人、釣り人や流れ者のような方々もいる。そのような方々が来て定着するかは分からないが、舞鶴であれば、舞鶴を知ってもらおうというのはあると思う。

南丹市でも関係人口や交流人口が増えるかなと思うが、その辺りは狙っておられないという意味か。

地域振興課：

こちらの狙いと、移住される方の思いが必ずしも一致しないので、こちらの狙いとしてはそこをきっかけに地域に繋がっていただければ、と思っている。関係人口のような浅い入り方の方を拒絶している訳ではない。バリエーションとして、お試し住宅にもそういうターゲットも使ってもらえるようにという効果はあるのかな、と思う。

委員：

地域振興課の担当になるかどうか怪しいところもあるが、とにかく人を呼び込んで、安ければ若者も来てボランティアもしやすくなると思う。

今回、5つの事業に関して地域振興課にお尋ねして、説明いただいた。丁寧に答えていただき、ありがたい。引き続きよろしく願い申し上げます。

■令和4年度交付金事業の評価確定

座長：

ここから次の議題に進みたい。次の議題は、地方創生交付金事業評価を進めていく。たくさん事業があるが、順番にいく。一つひとつの事業について、各委員の皆様に評価していただいた。これらを踏まえて、私達の会議としての結論を出したい。

各事業について、①～⑤の事前判定をいただいている。基本的には数が多い事業はその判定に

なるが、他の意見を聞いて考えが変わった、ヒアリングを通じて判断が変わることがあっても構わない。意見が分かれる中で、例えば、結論として①になったが特に言っておきたいこともあると思う。積極的な発言をお願いしたい。

進め方としては、1-1から順番に進んでいき、結論の提案をした時に、さらに意見があれば聞きながら進めていく。

■1-1 評価:①

委員:

特に何もなければこのまま①でよいと思う。

■1-2 評価:②

委員:

特になければ②で。

■1-3 評価:①

委員:

①が有効で。コロナで全国的にもサテライトオフィスが注目された。その後も傾向は続くのかどうかと言うところだが。

委員:

コロナが収まってきて、サテライトオフィスではなく出勤になるという話を身近でもよく聞く。その中でどう魅力が出せるのかが勝負だと思う。

委員:

過去を振り返るが、今後も続けていいのではないかと思う。

委員:

取組んでもいいと思う。企業ではなくフリーランスで色々な場所で働きたいと思う方は、これからどんどん増えると思う。今までは企業単位で誘致しているが、個人でも可能にする等の工夫をすれば良いのかなと思う。

委員:

私たちの会議も、面談が増えてきているが、ツールもできたので南丹市をPRする意味では支援事業として継続していただければと思う。

委員:

どうせなら、南丹市でしたいという企業もあると思う。なかなか難しいとは思いますが、今後、全国的な傾向でどうなるのか興味深い。そんな中でサテライトオフィスやリモートワークの誘致で特色、手本を示せればと思う。皆様の評価は有効であった①でよいか。

委員：

川辺地域で京都市内の企業がドローンの講習等を実施されているが、輸送用ドローン実証に向けて、地域の方々の御理解を得ながら、地域まるごとをフィールドに活用されていく動きがある。京都府ものづくり振興課と南丹市商工課が連携して取組を進めていただいております、全国的にも先進的な動きをされていると思う。

委員：

オフィス街や都市部ではできない、ドローンは飛ばせないので。

■1-4 評価:①

委員：

①が4名、②が5名と接戦になっているが、いかがか。

委員：

有効であった、で良いと思う。

委員：

どちらにしても。

委員：

どちらかという①にした。今、起業される方にとっては心強い。

委員：

私は有効であったと評価した。起業される方は、不安な中でされる方がいるので相談窓口であれば、心強い。継続していただきたい。

委員：

発言いただいた中では①が良いとの意見だが、いかがか。

■1-5 評価:②

委員：

①が4名、②が5名だが、いかがか。地域創生、地方創生をするようになってからすると、思いの外反響があった。そのようなことを継続的に聞いているなど。

委員：

①にしたと思う。件数が多いのか、そういうものなのか。とても有効な数字だな、と判断ができず難しかった。

委員：

最初、9年前に始めて最初はすごい数字が出た事業であった。ただ、同じところばかりになっていたりと良くない。何かご意見があれば。

委員：

今おっしゃったような内容で書き、②で評価した。最初とは状況も変わっていて一概には言えないと思うが、製造業で大規模なところは出していきやすいものになっているのかな、と思う。南丹市は、製造業も多いと思うので大事だと思うが、数が減っているところを見ると、やり方はこのままで良いのか、一旦考えるところに来ているのかなと感じる。

■1-6 評価:②

委員：

②が6名、③が3名。特にご意見が無ければ、②。

委員：

ブランドが何か定まらない中で何を推進するのかが私には分からず③にした。

委員：

南丹ブランドが何になるのか。

委員：

まず、その議論があってから推進の順番だと思うので、事業の順番が違うように思った。推進することは良いことだと思う。

委員：

各地域からの積極提案はしているのか。

委員：

農業はよく分からないが、商品だったり。朝倉山椒も前の事業でもあったが、何が南丹ブランドなのか。

委員：

輝くものはいくつか出てきて、その中で共通するものが南丹ブランドなのではないか。といったことか。反対に、このようなものを作ろう、と農作物がたくさん出てくるのもおかしい。南丹ブランドや南丹野菜を作ろうと昔はトライしたが、この際京野菜でいいのではないかとおりつつある。当初は南丹野菜を作るという話をしていた。課題はあるが、一定の効果はあるということで良いか。

■1-7 評価:②

委員：

①、②が4名ずつ。これは、迷うのか意見が分かれるのか。

委員：

評価としては①にした。担い手確保のために、子ども達へ体験教室を実施されたところで、有効であったと評価した。ものづくりのまち南丹市というところのイメージがまだ定着しないのかな、と思ってい

る。

委員：

②になっても、いいのか。ご尽力をいただいているので、否定するのではなく伸びしろがあるなという意味で。

委員：

今回、体験などをする場ができたことはよかった。今後の伸びしろがあると思う。私は①にしたが、今後に期待したいという気持ちである。

委員：

この事業自体はすごく良いと思う。「～のまち南丹市」、というフレーズがたくさんあり、一番最初はこの事業を推しでされていたと思う。いろんな事業が出てくるにつれて、方向を失っていくような部分があるように思う。これを担当されている方や、作家の努力で続いているように感じる。意見で出ているものをするのであれば、根本的なところを推すことをしないと事業で体験会をしたから良いとはならないと思う。

委員：

伝統工芸大学校から来ていただき、何かに触れてもらう。作家協会だけでは、と意見で書かせていただいた。

■1-8 評価:①

委員：

これは①が7名と多いが、このままでよいか。

■1-9 評価:②

委員：

これは①が4名、②が5名。今までの議論からすると②かなと思うが、よいか。

■1-10 評価:②

委員：

①が2名、②が7名。②になるかと思うが、どうすればもっと有効になるのかアイデアを教えてください。

委員：

商店街自体が全国的に衰退している中で、地域で活性化していくことは正直、難しいのかなと思う。京都市内に行けば、大手筋商店街などは賑わっている地域だと思うが、京都市内であっても商店街自身が衰退しているので、南丹市においても厳しいのかなと認識している。

委員：

何か集積していて特徴があれば。10年程前、向日市で激辛商店街をしていたりはあった。

委員：

以前、亀岡市でされていて今はもう続いてないが、決まった日程で各商店の強みとなる商品やサービス、様々な技を各店で体験できるような商店街のイベントがあって、それが素敵だと思っていた。お客さまと交流し、喜んでいただくことで、各商店さんの誇りと自信を呼び覚まし、ファンを作っていくてもらうことにつながることを期待できる。

委員：

今日は商工課に話は伺えないが、商店街自身の受け止めがどうなのかというのも気になるところがある。

■2-1 評価:①

委員：

特に意見が無ければ①。

■2-2 評価:①

委員：

全員一致で①。

■2-3 評価:①

委員：

特に意見が無ければ①。

■2-4 評価:②

委員：

①が3名、②が5名。地域振興課の話を伺ってある程度は住もうかなと思っていないと来にくいのかな、来てしまったら住むかも二度と来ないかのどちらかしかないのかな、と先程の話を聞いて正直に感じた。もう少し南丹地域にそっと触れられるものがあったらいいのかなと思って、私も②で評価している。

委員：

PRという観点が聞けて良かった。ここに住んだら最後のような。

委員：

定住促進サポートはもちろんとても良いが、先程言っていた他地域の定住者の家や駅みたいにならんと立ち寄ってしゃべれるのも悪くないと思うが、いかがか。

委員：

協力隊が終わってすぐは、そのような役割になっていた。

委員：

やはり、アポが必要で家族でわざわざ相談に行く、となると移住確率60%のようになる。移住者相

談の家のような、のぼりが立っていたら、ドライブしている風を装ってすごく良いので相談してみたら、その気になったなど、効果的かなと思う。もう少し、気軽に移住の可能性のある人を捕まえるような仕組みが南丹市にあってもいいと個人的に思う。京都が近いので、ぶらっと気軽に来れる。秋の田んぼを見ていて、こんなところに住めたらいいな、というところから話を聞いて進めることもできる。

■2-5 評価:①

委員:

①で良いか。

■2-6 評価:②

委員:

①が4名、②が3名、③が2名。

委員:

ピアノコンサートとのことで、それ以外の媒体を使ってもいいのかな、と思い③にした。

委員:

これもきっと、ターゲティングと、どういう移住者が来てほしいからどういう政策を打ちます、というのと同じ。FM 京都で放送されている。では、京都にお住まいの人に移住してほしいのかによって、評価の方法が変わると思う。ブランドとターゲットを定めることが無いまま、ピアノコンサートをして人がたくさん来ましたが良かった、となると、意味合いがどう受け止めていいのか難しいところがある。

委員:

ピアノコンサートも人がたくさん来たのも良かった、けれどシティプロモーションになるのか。

委員:

その辺りの質問をして、回答も今初めて見たが、子育て世代をターゲットにされているのであれば、実際子育て世代がどのくらい来ていたのかを検証をしながら、来ていなければ、どうすれば届くのか、手法を考えるべきではないか。

委員:

子育て世代がFM 京都をどの時間帯に聞くのか。何に出せば、ターゲットの目に付くのか。

委員:

子育て世代でFM 京都をすごく聞いていたが、コンサートに行きたいけれど、とても行きにくくて。行きたいのに行けないという感じであった。コンサート、いいなと思うが結び付かない。招待席や子連れでも行ける、というのがもっと打ち出されていれば良かったと思う。ラジオではそれが分からなかった。

委員:

今のところ②か③か。

委員：

②で。ターゲットと目的を定めてください、というところ。

委員：

では②で。

来年の話をするのは早い、「～のまち」のようにシティプロモーションやPRに関することがたくさん出ているので、次年度のテーマとして注目だと思う。もともと、このような会議で南丹市という枠組みで考えられないと言っていたことが、何にしようかということがたくさん出てきたというところまで変わってきた、ということでポジティブに考えたい。何を打ち出すかを考えるところまできた。

■2-7 評価:②

委員：

特に意見が無ければ②が多いので②でよいか。

しばらく東京圏には行ってないが、あちらに行くとJR東日本ではやたらと東日本が出てくる中で南丹市が出てきたら結構惹かれるのではないかな。京都駅で出ると近所すぎて、東京に行って、山形県へ行こう、新潟県は素敵だがたくさん出ている中で、京都の隣で南丹市と言われても、たまには違うものに惹かれるので、出してみてもいいのではないかな。

■2-8 評価:②

委員：

これは②がやや多い。これは、花火大会。ゼミ生達と行こうとしていたが延期になった。9月23日に開かれてどうだったか。

委員：

真夏ではなく涼しくてとてもよかった。灯籠も流すが、ちょうどお彼岸と重なったので良かった。来場者は多かったが、オーバーキャパにもならなかった。露店が並んでも買えないぐらいの状況であったが、地域の方は喜んでくださっていた。ドローンを飛ばしたり、工夫されていた。

委員：

花火大会が減っている中で、新しいモデルになる面もあった。

委員：

かなりお金もかかっていたようではある。

委員：

広報をそんなにしない方向でされていたが、閑散としていたわけではなく、お客さんがびっしりと埋め尽くされていた。昔のような商店街の道が埋まりきって歩けない、車がどちらにも進めない、ということが何もなかったように私は見えた。あのぐらいの規模が住民や、たまに南丹市に帰って来る方には喜ばれるのかなと感じて、上手くいったパターンに思ってみせてもらった。

委員：

警察も、右京や京都市内からも応援に来られていた。JRの沿線でサンガの試合と重なったこともある。

委員：

花火大会が減っている中、円滑に実行できたということで良かった。コメントだけ聞いていると①かと思うが、②のやや有効であった。

■2-9 評価:①

委員：

①が5名、②3名、③1名。ご意見無ければ、この中では①かと思う。

■2-10 評価:①

委員：

①が5名、②が4名。

先程も言った南丹広域振興局のSNS発信事業に深く関わっていて、3回生のゼミ生枠組で受託いただいた。そして、直営でされている事業に学生を紹介した。10名弱生徒で府立大、同志社、平女の学生が入って撮影に行く。皆、美山に行く。

委員：

いつもこのシートを見ながら、私たちがしていることを市の職員の方々はこのように理解されているんだなとよく分かる。

成果には書かれていないが、私達の協会が一番大事だと思っているのは戦略作りだと思っているので、そこが抜けていることが分かったので、努めたいと思った。

委員：

そこでいう戦略というのが大事なポイントだと思うので、どんな点を意識しているのか。

委員：

移住定住もそうだが、全体地域で人口が減っていく中で関係人口、交流人口をどのように創出していくのかを考えないといけないと思っていて、それは一つ観光を手法にしてやっていく。それをどのような事業でしていくかを地域のステークホルダーと合意形成していくのが、DMOの仕事だと思っている。それよりも、目に見える部分が成果として表れてくるので仕方がない部分ではあるが、インナーマーケティングがもう少し必要だと思った。

委員：

いろいろされていることもあると思うが、しょっちゅう来ても知らないこともある。京都駅と京阪京都交通バスに結ばれているが、あまり誰も乗っていない。私の子どももその事業に参加しているのだが、私の子どもがバスに乗った時に5人ほどしか乗っていなかった、と報告を受けた。行けば、レンタサイクルがあり、割とおしゃれなヘルメットで、電動アシスト付きで走りやすかったと言っていた。そのようなことも全く分からない。

■2-11 評価:②

委員:

②でよいか。多くの方が、横の繋がり、連携が重要と言うが、どうすれば進むのか、このような例があるとか、ヒントやアイデアを教えていただければ嬉しい。

委員:

目標出しを一緒に行う。どうしても、今までしていた各町のものを、淡々とするというのを美山から一番遠い八木に住んでいると感じる。美山を先頭に立って目標を決めて行っていらっしやるので、南丹市でここを見ようね、ここは役割分担ね、のようなことができるといいなと思う。

委員:

年に4回、3町とDMOと連絡会をしている。その中で意見が出るが、そもそも皆様がどこまでの目標値を立てて行きたいのか、バラつきがあるものだと思う。全てをボトムアップする訳ではなく、地域の事情に合った方法で進めていければいいのかなと連絡会を通して感じた。

委員:

全く別のものだと思っていた4つの組織が協力して、統一する必要はないがハーモニーになるような工夫は何かあるか。

委員:

美山は見えて観光資源がたくさんあり、頑張っておられることが見える。連携をして一体となって南丹市を盛り上げる活動が片方には必要なのかなと思う。何か統一したものがあればいいと思う。

委員:

なかなか難しい課題の中、少しずつ進んできている。1年単位ではピンとこないが、5年10年を振り返ると変わってきている面が多いと思うので、引き続き連携が課題という多数の意見をいただいた。

■2-12 評価:②

委員:

②でよいか。

■2-13 評価:①

委員:

①でよいかと思う。

■2-14 評価:①

委員:

①が多いので①で。

■2-15 評価:①

委員:

①でよいか。

■4-1 評価:①

委員:

①でよいか。何かこの点についてご意見を。

委員:

こういうのも含めてだが、5年先に集落がどうなるのか。先程の空き家住宅の話もだが、具体的に住民に資料を出して行って集落で話し合う機会を作らなければ、なんとなく高齢者ばかりだと皆が感じてはいるが、自分たちの集落の危機として捉えにくいのが現状だと思う。

委員:

あまり具体的にシビアに考えたくはないが、考える必要はある。もたないからと言って、合併するのか全員で引っ越すのも難しい。

委員:

農水省が各区に5年後、どのくらいの人が残っているのか、何歳の男女がどのくらい残っているかを出していた。

自分の地域で言えば、30代は5人は残るらしいが、そういうのを見ながら事業を組んでいくのもいいかもしれない。統計として、リアルに数字が出ているので。

委員:

今、言っていた数字も意識しながら進めてほしい。単純に延命措置の痛みを和らげることだけして、ある日突然倒れても困る。

今年度の評価としては①。冒頭でもあった他所の市町村に勤められるかまでは分からないが、南丹市に必要性があり有効性を考えて、半分援助していただいて南丹市でしたことが良かった。

■4-2 評価:①

委員:

①で。

■4-3 評価:①

委員:

①でよいか。

■4-4 評価:①

委員:

①が4名、②が3名、③が2名。

委員：

私は良い事業だと思って①にした。食は生きることになるので、①で進めてほしいと思う。

委員：

①ということで。

■4-5 評価:②

委員：

②で一致の理由は何か。空き店舗が増える中で南丹市の中心市街地をどうするのが大きな課題である。

委員：

どのような事業がよく分からない。

委員：

必要な事業だと思うが、中身が分かりにくい。

■4-6 評価:②

委員：

②でよいか。

■4-7 評価:①

委員：

一番多い①に。意見をお願いしたい。

委員：

活動期間が3年間と限られているので、もう少し伸ばしてもいいのかなと思う。乗ってきたところであったり、3年間で終わってしまうというのが中途半端に感じて②にした。

委員：

3年間使用して、そのあと自分たちで走っていけるようになればいいが。

委員：

3年間しかない、頑張ろう。と押しもらえる部分もあるが、事業をされるのに5年ぐらいは、と思ってしまった。

委員：

①のままではあるが、もう少し取組みが自分地域だけで回っているのでは無いので、行政からのサポートも期待したい、という声もあった。

■4-8 評価:②

委員:

人数が1番多い②にしようと思うが、ご意見があれば聞きたい。中間支援センターの規模をなかなか2つも3つもは難しい。

委員:

テーマコミュニティと地縁コミュニティがあり、農村部が多い中でどのようにリンクするのかが、この地域のまちづくり中間支援センターとして必要だと思う。

その辺りは、意識して大学生も含めていただいているとのことで、上手く機能しているのであれば良いと思う。その反面で、されている方自身が何を課題と思われるのかが分かれば良いと思う。

■4-9 評価:①

委員:

南丹市に通っていても、南丹市がどのようなまちかを知らない学生が多い。このような事業を通して少しでも学生が南丹市を知る機会を作れているので、有効だと思う。

まちづくりされる側にとっても、学生の意見は新しい視点になるのではないかと思う。相互の利益が生まれているように思う。

委員:

①で良いが、同時にもっと伸びしろがあるのではないかと、思う。まちづくり活動支援交付金を何年か連続していただいている、もうちょっと、大学に近い立地があるので、大学に使いやすい制度や上手にPRをすればもっと引き出せるのではないかと、思う。制度や声のかけ方が大学向きではないというのか、大学のことをご存知でないアプローチをしてもつたいない。

単純に地域振興課が担当されているので、どちらかと言うと地域寄りの発想をされる。そしてそんなにたくさんのお金が下りない場合、20万円いただければありがたい。ただ、大学からするととも少額。理系の100万、1,000万を取りにいっているセクションが相手をするので、下手に手を挙げると余計な仕事を増やすことになる。大学のどこに声をかけるか、どのような制度にするのか次第でもっとできそうな気がしている。

■4-10 評価:②

委員:

①が4名、②が4名と割れているがどうか。

委員:

やっている熱意はよく分かるが、これを長期的に維持できるのかが見えてこない部分がある。その観点では②になるかなと思う。

委員:

自分の地域が高齢化になってきて、何もかも後をする人がいない。どうかなという思いもあり②にした。そこにお金をかけるよりも他に力をいれるべきかな、と自分も高齢になってきて感じる。区の出役すら、なかなか若い人でも行かないということが自分の地域の現実。良い事業だと思うが、さっきのこ

とを思うと②にした。

委員：

私も5年前か6年前に当時のゼミ生と全ての小学校を見て回った。事業としては良いと思うが、この先小学校跡地がどうなるのかを考えだすと心配になると思うが、今回は②。

■4-11 評価:②

委員：

どちらかといえば②ということで。

■4-12 評価:②

委員：

これについても、②の方が多いのでどちらかといえば②ということで。

委員：

では、皆様のお力をお借りして、今年度も昨年度の分の交付金事業の評価をすることができた。いろんな地域のお互いの進んだ点も見えてきたし、引き続き課題として残っていることもあろうかと思う。皆様のご経験も踏まえたアイデアをいただける機会になって、非常に良かったのではないかと思います。

・次年度に向けて、委員から一言

委員：

8月は産後すぐで出席できなかったが、今回出席できてよかった。南丹市がふるさとになる人に向けての目線で見るとまた違った。5年10年もっと先にもっと良いまちになるといいなと思った。

委員：

事業先が増え、雇用も増え、人がたくさん来てもらえるのが一番良いと思う。そうは言っても、過疎化が進んでいるので、いかに食い止めるのかを民間だけでは難しいところがあるので、行政も力を借りて南丹市が盛り上がるとありがたい。

委員：

労働面では人手不足がひどく大きくなってきている。物流の問題も出ているが、トラックだけではなくバスの運行も減便ダイヤを実施しなければ通常ダイヤを運行できない程、人手が不足している。課題というのが、少子化対策を進めていく必要があると思う。労働の部分ではそのような大きな課題がある。

委員：

私事ではあるが、3年間お世話になり今年で現役最後の年になり、この回が最後となる。今話があったように、京都府の施策と同じ方向性のものがある。南丹市においても、部局間で連携を取ってもらい、どこかで束ねてもらう仕組みを整えてもらう。京都府においても、同じだと思うのでしっかりとさせていただきます。人口減少という課題もあるが、人が少なくなっても幸せに暮らせる地域はそれぞれに答えがあると思う。そのためにいろいろな行政施策や企業の活動がある。その辺りのベクトルを京都

府と一緒にって取り組めるように頑張ってもらいたいと思う。

座長：

南丹市はこのように、たくさんの事業で交付金を受けながら、京都に近いようで少し遠い位置感の中で特徴のあるまちで、可能性があるとずっと思っている。南丹広域振興局の事業では、亀岡や京丹波もいるので亀岡が栄えていて、京丹波は元気でおしゃれに思える。南丹市好きだが、もっと伸びしろがあるように最近感じさせられる。

有識者会議の皆様には、大変活発的に関わっていただき感謝申し上げます。引き続きのお力添えのお願いを申し上げて、今年度の会議は終えたい。

4、その他

・事務局からの連絡事項

5、閉会

■事務局からの連絡事項

・年度内会議は今回で終了の予定

・来年6月～7月頃に開催予定